

小山 清著

『国語科教育の理論と実践 十』

『続・教育実習の手引き —国語科教育の実践的研究—』

広島大学附属中・高等学校で国語科教育の実践、研究に取り組んでいらつしやる小山清先生が、日々着々とおまとめに

を受賞した第一集（昭和五十四年六月刊）以来、本書まで十冊に収められた御論稿は、合計二百六十編にのぼる。

本書は次のように構成されている。

○教育実習の手引（六編）

○教材の扱い方と授業の実際（六編）

○授業記録（虎の威を借る狐）

○古文実力テスト三題

○柳田国男芭蕉論の考察

○私の「国語科教育法」

○広島高等師範学校附属中学校教育実習の歴史（三）
—終戦直後を中心にして—

○俳句鑑賞

○講話（二編）

○郷土のことは（四編）

○教材論「いぼ」「屋根の上のサワン」

「教育実習の手引」では、「教材への切りこみかた」「授業展開のありかた」

などのテーマのもと、実際に教材をとりあげてその指導過程（発問計画）、板書

計画、指導上の留意点などが具体的に示されている。もちろん小山先生御自身の

実践が中心になっているが、加えて先生

が參觀なされた授業の批評とその改良、国語科教育法を講じられている広島女学院大生のレポート、細案とその批評なども収められていて、それぞれのテーマが多角的に究明されている。

「教材の扱い方と授業の実際」も同様
に六教材の教材研究、指導計画、実際の授業と板書などが詳細に示されている。

国語科教育をめぐる多様なテーマを広く取りあげた各論稿において、小山先生が一貫して主張なさっているのは、「教材の構造を見ぬいて鋭く切りこみ、授業の中で生徒が『考える問題』を設定する」ことである。授業の経験をただ重ねるのではなく、教材の構造を見きわめる力を意識して習練しなければ、教材へ鋭く切りこむ力は身につかないことが強調されている。そのため

○一つ一つが明確で、精選された関連性のある発問。

○簡潔で構造化があり、深い読みが示されている板書。

の研究の重要性を力説されている。

この主張は、小山先生が授業のため作

成された板書計画、発問計画を記した一万枚を越えるカードから産み出されたものである。一つ一つの提言が、授業実践を経ることによって高い実証性と説得力を持つているところに、本書の大きな特長を見出すことができる。

また、読者の授業力向上のための留意点が随所に示されていて、小山先生が本書に込められた、国語教育実践者ひとりひとりへのメッセージを感じ取ることができるような思いがする。

「授業力の錬成」と「おもしろくてわかりやすい授業の体系化」(あとがきより)を旨し毎日の授業に取り組んでいらつしやる小山先生の意欲的なお姿が、一編一編どの論稿にもうかがわれ、思わず姿勢を正し自分の実践を省みる、そんな読後感を持った。

さらに、三省堂の国語教育叢書十八として「統・教育実習の手引き」が同叢書八の続編として刊行された。『拝啓教育実習生様』という中三生のレポートを基にしたプロローグに始まり、「学習指導案作成・板書・発問・通説・テスト問題

作成・授業観察」の各テーマについて論じられた第一部と「説明文・古文・俳句・作文・漢字」の指導のあり方を論じた第二部とから構成されている。「国語科教育の理論と実践」の特長をそのままに活かし、豊富な実践事例を交じえ、わかりやすく展開されている。

本書が教育実習生のみならず、国語科教育に携わる全ての実践者の授業力向上に資することはいうまでもない。

(A5判 二〇三ページ)

一九九二年十月二十日

私家版 頒価 一、〇〇〇円)

(四六判 二〇八ページ)

一九九二年五月十日

三省堂 一、八〇〇円)

(河野 智文)